

6. ネットワーク化を促すもの

(IBM ズートミア研究所)

< はじめに >

IBM ズートミア研究所は国際ネットワークに関する同社のヨーロッパにおける中心である。IBM ヨーロッパが事業展開している英、仏、西独、伊、スイス、スペイン、ポルトガル、北欧等々と結ぶとともにタンパ(北米)、東京、香港へと伸びている。280人の研究所員のうち、140人がこのネットワークの運用にあたり、130人が研究開発を担当している。エンド・ユーザーは6万人にのぼり、メイン・コンピューター16台、電話120回線、自社ライン600回線で電子メール、VANサービス、データ交換等々のサービスを行っている。

まさに、ヨーロッパを舞台に活発なネットワークサービスを行っているわけだが、さらにこれを発展させるべく、1992年のEC統合をにらんでの戦略を着々と進めている点で各方面から強い関心を集めている。保守的で決して大きくはない市場が国内市場にとどまらず手を替えながら日米に対抗した実力をつけていこうとしている中で、問われているのが、低い技術力をどこまで向上させていくことができるかに他ならないからである。

< 電子技術が焦点 >

EC統合の目標が、欧州をひとつの市場にまとめて国際競争力を強化することにあるが、自動車、食糧、鉄鋼等とはもかく、Tele-Communication、ソフトウェア、セミコンダクター技術に於いてはそう簡単にはいかないのは周知の事実である。しかも、ECに加えて3.5億人の人口をかかえる東欧が控えているのだから負担も大きい。既に、ECプログラムやユーレカ・プロジェクトがスタートして、この分野での競争力を高めようとしている。IBMヨーロッパは例えば「交通管制システム」開発に対して各国の自動車メーカーと共同研究を進めている。自動組込みPSをはじめ、LAN、信号統制などが中心だが、このためには、ラ・ゴード研究所で取り組んでいる欧州の国際基準づくりはむろんだが、電子技術そのものの向上をどうするか、インフォメーション技術サービスをどう向上させるかという幅広い観点からの取り組みが必要との考えである。

このために、IBMヨーロッパのユーザー55社の経営者にEC統合に関連し、いま必要なこと、関心を持っていることについてアンケートをとったところ、

(1) 具体的要求として

Industry Solutions
Professional Services
International Support
Industry Standards

(2) 関心事として

Internationalization
Tele-communication System
Skill & Resource

であることがわかった。

とくに、1992年のEC統合は、ヨーロッパにとって触媒にすぎず、企業が本当に脱皮して力をつけることができるかどうかは、各企業の努力にかかっているとの認識が強いという。電子技術の立ち遅れはソフトウェア面での弱体化につながっているが、遅れた分を一気に取り戻すべく動こうとしている。

この点でIBMに対する期待は大きいという。元来、多国籍企業として国際的な目で経験を積んで来ただけにインフォメーション技術を中心に共同開発が盛んである。例えば、ベンツとの間で自動車の電子化とともに、新しい分野としてのエレクトロニクスや航空機への進出など、ノン・コア・ビジネスの可能性を探っているという。

< ネットワークに関心 >

EC統合は、企業にとってはヨーロッパにどのようなネットワークを形成できるかの問題でもある。これまでのように、国内市場にとどまっていたには限界があるばかりか、日米との激しい競争によって飲み込まれてしまう。やはり、ネットワークという面的な広がりの中で対抗していくしかない。

ただ、EC統合の目指すものがヨーロッパ全体の開放である以上は、つくられるべきネットワークもオープンなものでなければならない。企業は株主と従業員というクローズされた中で活動し、かつ独立性を持ち、しかもあらゆる分野を対象にしている以上、その都合や事情を十分に考慮していかなければならない。

IBMヨーロッパは、当面はまずこうした要求に対して十分に即応できるネットワークをつくるべく、研究開発に精力的に取り組むとともに、何よりもその出発点となる標準化に

全力をあげている。そして、各国の状況や動きをよくみながら各々の企業といかに共同作業を進めるか、アプリケーション、アーキテクチャー技術をどう作っていくかを重点的に取り組んでいこうとしている。このために必要な各国企業の提携や合併にも積極的で、例えばシーメンスと共同でチップの開発に入っているし、もともと得意とする電算技術を応用してのサービスも各分野に働きかけていく考えである。

このように、IBM ヨーロッパが判断しているのは、第一に、EC 統合が 1992 年となっているが、既に統合に向けての動きが本格化し、具体化し、そのスピードはますます速くなっていると分析しているからである。各企業は、EC 統合、あるいはヨーロッパ全体の統一などというレベルは通り越して、それによって得た力を国際市場、とくに日米をにらんでいかに戦っていくかまで踏み込んでいる。ヨーロッパの中での利害を求めるとも地力を十二分につけることで、立ち遅れている市場での失地をいかに回復するかに血眼になっている。

第二には、1992 年に向けての動きが、官民一体となって後には退けないところまで来ており、各々が至上命令としてゴールを定めてぶつかっていつている現状である。走り出している以上とでも止めるわけにはいかないところまで来ている。

第三には、そうはいくもののヨーロッパの実状からみると、ルールは敷かれたものの、それは目標に向っての道筋がはっきりしたにすぎず、本当に動き出すには時間がかかるという判断が働いている。いわんや、東欧、ソ連を取り込んでいくには 5 年、10 年という長い時間を必要とする。だから、第四には、技術提携を求められている IBM ヨーロッパとしては、できるだけの支援をすることで、遅れがちな技術革新を思い切ってバックアップし、本当に自立できるものにしていこうとしている。ドイツの通貨統一にみられるように、経済の動きが政治を巻き込んで新しい潮流をつくり出しているが、技術革新を忘れてはかえって不満を残しかねない。やはり、ネットワークを構築することを通して、地域的な安定をはかっていく以外にないであろう。

もっとも、ヨーロッパが地域内で固まる危険性に対する警戒も働いている。日米への対抗意識だけでは経済は立ちいかない。競合ばかりに気を奪われ、孤立化してしまつては意味がない。ネットワークの重要性という問題もこのことなしにはあり得ないと指摘している。